琉球大学学術リポジトリ
University of the Ryukyus Repository

Title	クロイワヤモリ Gymnodactylus albofasciatus kuroiwae Namiye について
Author(s)	高良, 鉄夫
Citation	琉球大学農学部学術報告 = Science bulletin of the Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus(1): 90-92
Issue Date	1954-04
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21508
Rights	

国立大学法人
琉球大学
University of the Ryukyus

クロイワヤモリ *Gymnodactylus albofasciatus kuroiwae* Namiye について

高　良　鉄　夫

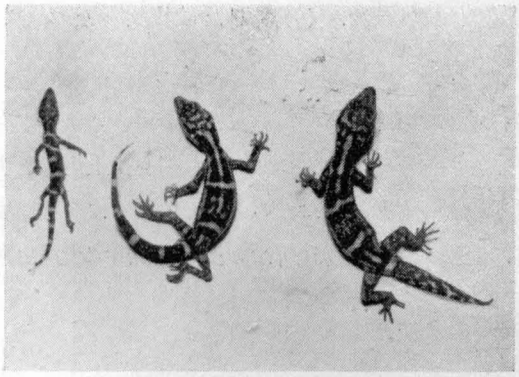
Tetsuo TAKARA: Notes on *Gymnodactylus albofasciatus kuroiwae* Namiye in Kerama Islands, Ryukyus.

本種は黒岩 恒氏（1909）が沖縄本島羽地村において採集し，波江元吉氏（1912）によつて新亜種として発表されたものであり，波江氏は他日第2の標本を得て *G. a.* Boulenger の種と比較詳記する旨述べられているが，筆者の知る範囲に於ては，その後採集された報告がなく，今日なお当時の報告のみが多くの文献に引用されている。筆者は 1952 年 12 月ハブ *Trimeresurus flavoviridis*（Hallowell）の増殖並びに咬傷加害状況調査のため，慶良間列島中の渡嘉敷島に渡航した際，渡嘉敷中学校において腐敗しかけた本種の1標本を観察し，更に翌年6月～10月にかけて同島から3匹を入手し，慶良間列島に本種が分布することを確認した。渡嘉敷島の爬虫相は沖縄本島北部地区に類似し，且つ同島ではつとに本種をヂーハブと俗称しており，従つて今時戦争の結果外地から輸入伝播されたものでないことは明らかである。ここに蒐集した資料にもとづいてその形態，生態の概要を述べようと思う。

形　態

形態については波江氏の報告と大同小異で重複するところもあろうが，筆者の蒐集した数個の標本にもとづいて一応その特徴を述べ，波江氏が疑問に思われた点，その他形態，色彩，斑紋上の変異についてはできるだけ詳しく述べることにしたい。

特　徴　頭部は扁平でほぼ三角形を呈し，喙端鱗はやや方形，幅は高さの約2倍にして1対の鼻間鱗と鼻間鱗の間に介在する 1～2 小鱗に接する。喙端と眼との距離は眼と耳孔との距離に等しい。耳孔は斜にやや卵円形を呈し，眼瞼は開閉する。上唇鱗は 10～11 枚にして上部は細鱗に接する。頤鱗は大形で，咽頭鱗はそれ程顕著ではない。下唇鱗は 7～10 枚を数え，やや大形の顆粒鱗に接する。四肢は比較的長くその背面には体背面と同様な顆粒がある。指は長く指間膜を欠き扁平ではない。指の裏面の褶は隣接鱗よりやや大きく指端には各指とも鈎爪を有し，鈎爪基部の周辺鱗は隣接鱗より長大である。頭部及び胴部には一面に顆粒が見られ，その配列の状況は個体により多少異つているが概して規則的である。これらの顆粒は頭部のものは胴部に比較し



クロイワヤモリ
Gymnodactylus albofasciatus kuroiwae Namiye（渡嘉敷島産）

て概して細い。尾部は円柱状で平滑な小鱗がやや規則正しく配列し，その中に刺状に変化した鱗を混生するが，その配列も概して規則正しい。この刺状鱗は基部附近に於て著しく，尾端に至るに従い不鮮明となる。体色は体背面黒褐色にして腹面は淡紅色を呈する。頭部背面には紅色の新月紋乃至その変形紋の見られるものがあり，頸部より肛門部にかけて紅色の横紋とその横紋間を接続する紅色条紋がある。尾の基部より末端にかけては背腹両面を取り巻く紅色環状紋がみられる。これらの紅色斑紋は何れもフオルマリン漬の標本では脱色されて白色斑紋となる。

変　異　喙端鱗の上縁は丸味を帯び，中央部の凹むものと然らざるものがあり，頤鱗は大形でやや三角形を呈するがそれに接する咽頭鱗の数，形，大さにより多少その形状を異にする。咽頭鱗は明かに認められるものと然らざるものとがあり，その数は4～5 枚で両側のものは概して大きいが，これもやはり個体によつて多少異つている。尾部の刺状に変化した鱗は再生した尾には全く認められず一様に小鱗で被われている。

後頭部における紅色の新月紋乃至その変形紋は顕著なもの，不鮮明なもの，あるいは全く認められないものもあり，その数，配列の状況は個体によつて著しい変異がある。また，これらの斑紋は単に後頭部のみでなく，頭部全面に見られるものもある。頸部より肛門にかけての紅色横斑紋は両腹側に達するものと然らざるものがあり，その数，鮮明度も個体によつて異つているが普通 3～4 個を数える。条紋も背中央部並びに両腹側に各1条あるもの，背中央条紋の確認に難しいもの等がある。尾部の紅色

クロイワイモリの測定概括（mm）

番号	性別	全長	尾長	喙端—耳孔	頭部最大巾	前肢長	後肢長	上層鱗	下層鱗	備考
1	♂	67	30	10	7	13	18	9—9	8—8	
2	♀	141	65	17	13	25	30	10—10	9—9	
3	♀	126	46	19	14	26	32	10—11	10—9	尾部再生のもの
4	♂	76	34	11	8	14	19	10—10	8—7	

備　考　上層鱗及び下層鱗は左—右を示す。

環状紋の数は 5～7 で，再生した尾部では環状紋はなく不規則な波状紋となつている。

生態の概要

本種は四肢が長く，指に吸盤がなく各指とも鈎爪をもつており，一見樹上生活をするもののように思われるが，慶良間列島（渡嘉敷島）においては石垣とくに塵埃捨場附近の石垣内に棲息する。春夏の候になれば日中は棲息所にあり，夜間出て小昆虫類を捕食するようである。

考　　察

以上述べたように本種は頭部諸鱗板並びに斑紋など個体相互間の変異性に富むものであり，これらの観点から考察すると *Gymnodactylus albofasciatus* Boulenger と同一種ではないかと思われるけれども，原著がなくまた波江氏の *Gymnodactylus albofasciatus kuroiwae* Namiye に対する記載とくに喙端，鈎爪基部の鱗片について詳細な比較説明がなされていないので *G. a.* Boulenger と同一種と見做すべきか否かの論議については更に多くの材料を入手し，生態等も究明の後に論及したいと思う。

摘　　要

1）クロイワヤモリ *Gymnodactylus albofasciatus kuroiwae* Namiye について，その変異と生態の概要を述べた。

2）本種は個体相互間の変異性に富みとくに喙端鱗，頤鱗の形状並びに咽頭鱗の形状，数などは各個体によつて著しく異なつている。

3）頭部における紅色紋の形状，数，配列の状況，胴部に於ける紅色横斑並びに尾部に於ける紅色環状紋の数は各個体によつておもむきを異にする。

終りにのぞみ貴重な文献を貸与された岡田彌一郎博士に深甚なる謝意を表する。

参 考 文 献

1. 波江元吉 (1912): 沖繩産守宮類について. 動物学雑誌. XXIV, no. 286.
2. 岡田彌一郎・高桑良興 (1932): 爬虫類の生態と進化.
3. 岡田彌一郎・木場一夫 (1935): 沖繩諸島及近接島嶼の脊椎動物目録. 沖繩博物学会報. I, no. 1.
4. 岡田彌一郎 (1936): The geographical distribution of Geckonidae in Japan. 生物地理学会報. VI, no. 9.

Résumé

The morphology and biology of "Kuroiwa-yamori" (*Gymnodactylus albofasciatus kuroiwae* Namiye), which was collected from Tokashiki-shima, the Kerama Islands, were studied.